



日本IBM株式会社 松永達也(上)と中山裕之(下)



ソフトバンク株式会社 宮内謙氏による特別講演

Personality Insights』を利用して性格分析もできます」と話し、Twitterの投稿から分析した性格分析のデモ結果を紹介し、社内の関係性向上、人材派遣、婚活などのマッチングに応用できると話しました。

コグニティブ・ビジネスはすでに始まっている 実用段階にあるWatson

コグニティブ・システムに関する経営者向けの調査結果も示されました。流通業界では、94%が顧客の期待に応えるために、ヘルスケア業界では95%が戦略的な意思決定に、また保険業界では98%がビジネス・モデルの変革のために、コグニティブへの投資を計画しているとい

います。
従来は構造化データしか理解できなかったコンピューターが、コグニティブの世界では数値やテキストに加え、画像、音声、自然言語、空気感などの非構造化データも理解できるようになると中山は強調します。「インターネットとモバイルの爆発的普及によって情報の88%はコンピューターが理解できない非構造化データになっています。この非構造化データをコグニティブ・システムで分析することで、必ず新たな発見があると考えています。また、企業内に埋もれているダークデータをWatsonで仮説を立てて推測し、学習することでビジネスに活用することも可能です」

Watsonはグローバルで400以上のパートナーと、8万人以上のデベロッパー、160校を超える大学で活用され、コグニティブ・ビジネスを加速させるエコ・システムになっていると説明する松永は、「より新しいアイデア

やビジネス・モデルの変革をWatsonとともに進めていくために、IBMはお客様を支援していく考えです」と語り、基調講演のまとめとしました。

「Half and Twice」の実現のために Watsonに期待を寄せるソフトバンク

特別講演では、「IBM Watsonでのビジネス変革〜リアルビジネスでの活用に向けて」と題し、Watsonの開発と市場導入において日本IBMと戦略的提携を結んだソフトバンク株式会社の代表取締役社長 兼 CEOの宮内謙氏が登壇。

冒頭で宮内氏は、米国のジョージア工科大学で学生の質問に応える学内サポートセンターにおいて、的確な回答で常に人気だったアシスタント・ティーチャーの“ジル”の事例を紹介しました。ジルはWatsonを活用していましたが、学生たちはジルのことを人間だと信じて疑わなかったそうです。宮内氏は「このケースによって、Watsonによるリアルビジネスが始まることを確信しました」と話します。

ソフトバンクでは、全社員が最新のICTを活用し新たな価値を生み出す「スマート経営」を目指し、「クラウド/IoT」「Watson/ロボット」「スマートデバイス」「ビッグデータ・アナリティクス」の4つのテーマに注力することで、業務工数・コストを1/2に、生産性・創造性を2倍にする、「Half and Twice」を目指しています。その実現のためにWatsonに期待していると宮内氏は話します。

具体的には、コンタクトセンターの意思決定支援や、ショップの接客サポート、法人営業の提案アドバイスに

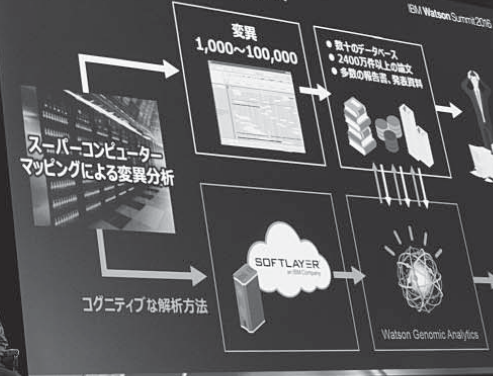
IBM Watson Summit 2016

ようこそ、コグニティブの時代へ。



パネルディスカッションの様子。左から、日本IBM株式会社 池田和明(ナビゲーター)、富士重工業株式会社 武藤直人氏、株式会社かんぼ生命保険 廣中恭明氏、東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析センター 宮野悟氏、日本IBM株式会社 吉崎敏文

ゲノム医療の時代に必要な情報解析



Watsonを活用しようとしています。2016年の夏頃には本格的に活用を開始し、社員サポートセンターや人事、法務、財務などにも拡大する計画です。

「すでに国内150社以上の法人様にWatsonの導入を検討していただいています。また、Watsonのパートナー企業が続々と参加しており、Watsonを活用することで生産性と創造性を向上させるための知識やノウハウが蓄積し、今後優れたアプリケーションが続々と登場するでしょう」と宮内氏はWatsonへの期待を語り、「Watsonによるリアルビジネスが今まさに始まっています」と講演を締めくくりました。

膨大なデータや人の経験・ノウハウの解析などに、今後のコグニティブ・システムの活用領域がある

パネルディスカッションでは、富士重工業株式会社 取締役専務執行役員の武藤直人氏、株式会社かんぼ生命保険 執行役の廣中恭明氏、東京大学医科学研究所教授で理学博士、ヒトゲノム解析センター長の宮野悟氏が、それぞれ自組織におけるWatson活用を日本アイ・ビー・エム執行役員ワトソン事業部長の吉崎敏文とディスカッションしました。

コグニティブ・システムの今後の発展について、3名のパネリストからは、「車と車のそれぞれの個の要素の中で、人工知能をどう発展させていくかが、お客様への新しい価値提供に繋がると考えています」(武藤氏)、「色々なデータがある中でいかに効率的に処理できるか、データアナリティクスと合わせてWatsonを活用できるとよいと思います」(廣中氏)、「研究者の作り出す自然言語や



富士重工業株式会社 取締役専務執行役員
武藤 直人 氏

「スバルは運転支援システム『アイサイト』によって車の安全レベルを高めており、その結果、アイサイトを付けた車で人身事故が6割も減少しました。しかし、まだ4割が残っています。それをIBMのWatsonを含むコグニティブ技術を活用して自動運転技術の精度を高めていくことで、お客様の安全を守りたいと考えています」



株式会社かんぼ生命保険 執行役
廣中 恭明 氏

「これまで保険金の支払査定において、特に高難度な案件については、査定者の経験・知見により判断していました。Watsonに数百万件もの膨大な情報を学習させることにより、査定者を支援することが可能となり、更なる査定品質の向上へ繋がるものと考えています」(8ページ参照)



東京大学医科学研究所教授 理学博士
ヒトゲノム解析センター長
宮野 悟 氏

「ゲノム解析が実用化し、生命科学が発展すると、関連論文が指数関数的に増加します。膨大な量の電子化知識の氾濫は人智・人力を超えた世界です。しかし、Watsonはそれを全て読み、理解できるのです。スーパー・コンピューターとWatsonによって、新しい医療の可能性が見えてきます」

音声、画像などの知識から精度の高い的確な医療を作っていくことが重要で、Watsonはそのために必須の支援要素になると思います」(宮野氏)との言葉をいただきました。ナビゲーターを担当した執行役員 グローバル・ビジネス・サービス事業 ビジネス・コンサルティング担当の池田和明は、「過去、企業や組織の中に蓄積されてきた膨大なデータや経験の活用、人間の能力では到底解析できない莫大なデータの解析などに、今後のコグニティブ・システムの活用領域がありそうです」と総括しました。